

中国四川省 Longshan（龍山）遠征報告

目次

1. はじめに	1
2. 遠征の時期	2
3. 山の場所と概要	2
4. 遠征メンバー	3
5. 行程と登攀ライン	4
6. アタック 装備 （B Cより上部）	12
7. 遠征費用	17
8. 記録	18
9. 参考情報	30
> 遠征本番までの過程	30
> 登山時期と気象	30
> エージェント	31
> 中国での物資調達	31
> 中国での通信機器	32
> 衛星携帯と無線	32
> 中国元の用意や支払い方法	32
> 中国でのクレジットカードの利用	32
> 高所順応について	33
> 氷河の水	33
> B C 食	34
> 燃料について	34
> 中国人と接してみて	35
10. 遠征を振り返って思うこと	36

1. はじめに

2025 年は田部井淳子さんのエベレスト遠征から 50 年になるということ、遠征から帰国して知った。半世紀という時間は、社会の価値観や登山を取り巻く環境を大きく変えるには十分な長さのはずだが、この 50 年でどのくらいの女性が海外の高峰へ挑戦しただろう。

国内でのアルパインクライミングやその先にある未知の峰、壁への高所登山という危険な遊びを、私は別におすすめして普及したい訳ではない。が、私はもっと早いうちに色々な情報、人に出会っていたらもっと早くこの世界を楽しんでいたのに、と思っている。

もし若い頃の自分が、すでにこの世を去った女性クライマーや、出産・子育てによってしばらく山から離れざるを得なかった先輩たちと出会えていたら、何を感じ、どんな未来を選んでいただろうか。二十五歳、あるいはもっと若い時分に、彼女たちの強さや情熱に触れる機会があったなら、私の登山人生は別の形をとっていたかもしれない。若い頃の自分は、海外の未踏峰への挑戦なんて、果てしなく遠くにあるものと思っていた。

現代は情報の溢れた社会だが、未知の壁や峰を目指すような海外遠征は母数も少なく、それに至るまでの過程の情報に接する機会は少ないように思う。だからこそ、過去の挑戦を記録し、その知見を共有し、未来の登山者につなげることに意味があるはずだ。この報告書が、これから山と向き合う若い登山者、特に女性クライマーの目に触れ、「自分も行けるかもしれない」という小さな情熱の火を灯す存在となってほしいと願っている。

～私と四姑娘山、龍山との出会い～

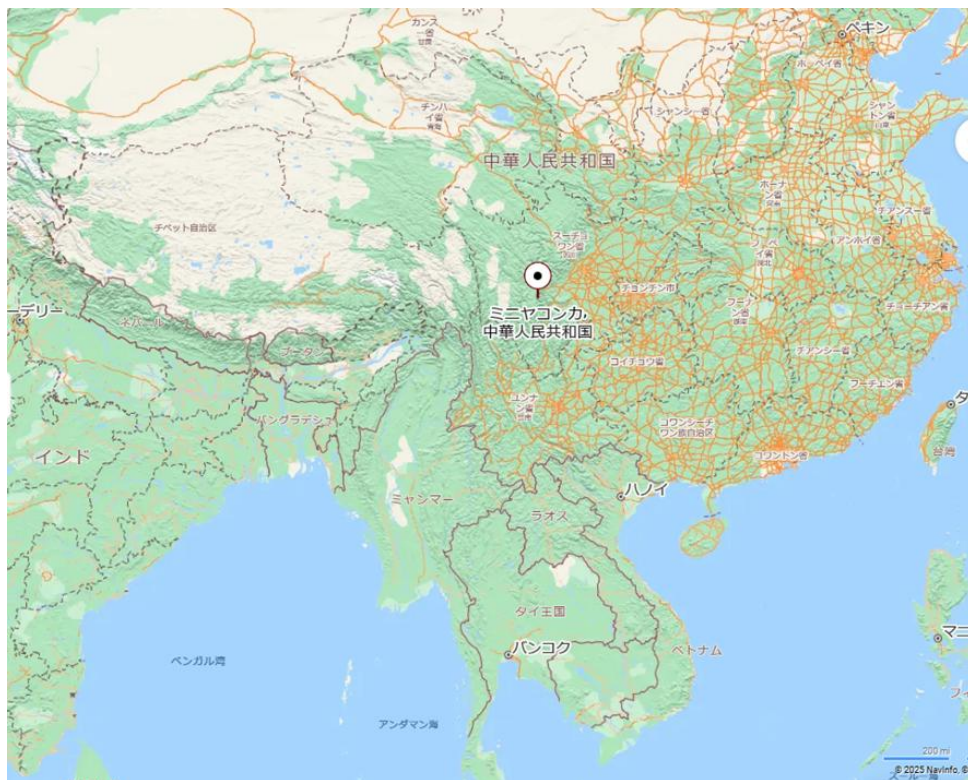
2020 年に四姑娘山をこの目で見た時から、4 峰の全山縦走計画を考えていた。その計画を実行するべく、私は遠征の 1 年以上前から 3 人のメンバーを誘い、4 人パーティを作って、冬は八海山・ハッ峰、春は利尻南稜と本番を想定した訓練山行を行った。4 人で雪稜をスピーディに登ることにフォーカスしてロープシステムを確認・反復練習してきた。が、2025 年春になって「四姑娘山での幕営禁止」という情報が入り、その真偽を各方面へ確かめたが、どうやら本当で、昨年から自然保護という名目で四姑娘山を取り巻く 3 つの谷周辺での幕営が禁止されているようだ。一時は絶望し、踏み出した足の着地場所を探していたが、次の目的地は四姑娘山のさらに西にあるミニヤコンカ山群に決めた。これまで 3 度にわたる四川省・雲南省での登山においてミニヤコンカは訪れたことがないまでもその存在は意識していた山域だった。そして最高峰のミニヤコンカ（7556m）の南に位置する Longshan(6684m)へ照準を合わせた。中村保氏の「East of the Himalaya Mountain Peak Maps」に掲載されている朝日に燃えるピークの写真に、かつてその美しさに言葉を失った梅里雪山の神々しいモルゲンロートが思い出されたからだ。調べてみると、Longshan は未踏峰だった。そうして、意図せずして私たちの遠征は「女性だけの未踏峰挑戦」になってしまった。

2. 遠征の時期

- ・ 日程：2025年9月28～10月25日（滞在28日間/山中22日間）

3. 山の場所と概要

- ・ 山名：Longshan(龍山 / 龙山)
- ・ 山系：中国四川省ミニヤコンカ山群
- ・ 標高：6,684m
- ・ 登山史：2015年2月 アメリカ隊3名 6,500m 南稜の肩まで
2024年10月 中国隊2名 龍山下見のため南のピーク朱山北峰に登頂
未踏



⇒成都から最後の村まで 300km、車で約5時間

4. 遠征メンバー

- ・上野はるか（隊長）
34 歳、山梨在住、アルパインクラブ NPO さいたま/チームやまめ所属
- ・伊佐見奈穂子
35 歳、埼玉県在住、山登魂/チームやまめ所属
- ・鈴木彩子
45 歳、埼玉県在住、アルパインクラブ NPO さいたま所属
- ・桑原郁美
28 歳、北海道在住、札幌北稜クラブ所属

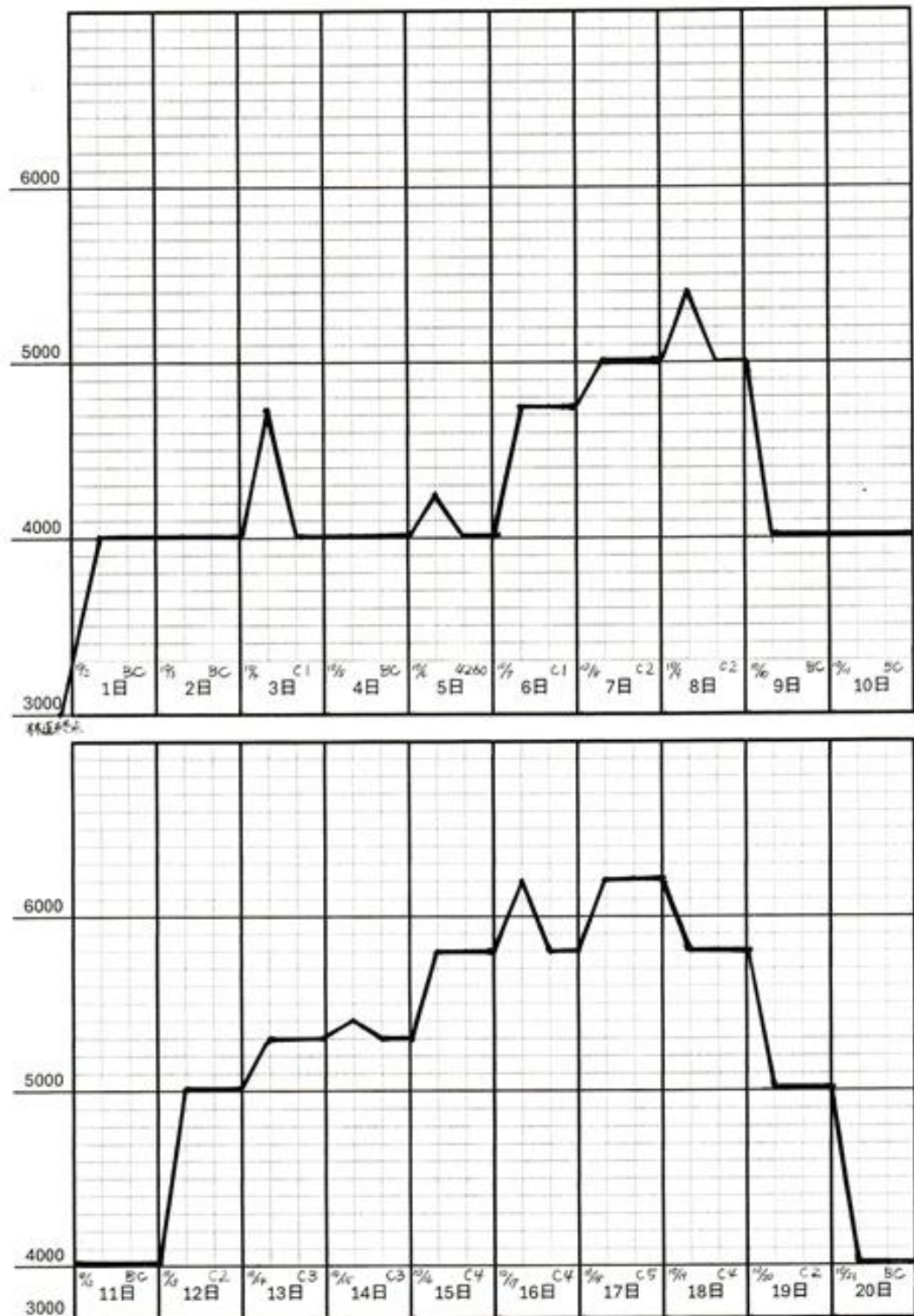


↑左から上野、伊佐見、鈴木、桑原

5. 行程と登攀ライン

- ・行程：出国から帰国まで全28日間、山中22日間。
BC 設置後、C1(4750m)までの日帰り、C3(5400m)までの3泊4日という2回の
順応&偵察を行い、アタックは8泊9日で行った
- ・登攀ライン：BC～C1 概ね歩きやすい尾根⇒C1～C2 モレーンカバーされた氷河上⇒C2
～C3 朱山尾根南面の岩場⇒C3～C4 氷河&セラック帯を龍山西面に回り込
む⇒C4～C5 龍山西面の氷雪壁の登攀

	日付	行程	宿泊場所
1	9月28日	成田-成都(天府国際空港)	ホテル(成都)
2	9月29日	shopping in 成都	ホテル(成都)
3	9月30日	成都ーshimian	ホテル(Simian)
4	10月1日	Simian hotelー林道終点	2950m
5	10月2日	林道終点-BC 入り	BC/4030m
6	10月3日	休養	BC/4030m
7	10月4日	BC から C1(4750m)の往復	BC/4030m
8	10月5日	休養	BC/4030m
9	10月6日	4260m へ荷物デポ	BC/4030m
10	10月7日	BC から C1(4750m)	C1/4750m
11	10月8日	C1 から C2(5070m)	C2/5070m
12	10月9日	C2 から C3(5400m)→C2	C2/5070m
13	10月10日	C2 から BC へ下山	BC/4030m
14	10月11日	休養	BC/4030m
15	10月12日	休養	BC/4030m
16	10月13日	1 BC から C2(5070m)	C2/5070m
17	10月14日	2 C2 から C3	C2/5070m
18	10月15日	3 C3 からルート工作(上野&鈴村)	C3/5400m
19	10月16日	4 C3 から C4	C4/5820m
20	10月17日	5 C4 からルート工作(桑原&伊佐見&上野)	C4/5820m
21	10月18日	6 C4 から C5	C5/6230m
22	10月19日	7 C5 から C4 へ下山	C4/5820m
23	10月20日	8 C4 から C2 へ下山	C2/5070m
24	10月21日	9 C2 から BC へ下山	BC/4030m
25	10月22日	休養	BC/4030m
26	10月23日	BCーShimian Hotel	ホテル(Simian)
27	10月24日	Shimian Hotelー成都	ホテル(成都)
28	10月25日	成都天府国際機場ー成田 (Tokyo)	-



↑ アタック行程と滞在標高



↑ GPS の登攀ライン



↑ 各キャンプの位置と登攀ライン



↑ BC 上部（渡渉前）から C1 へ



↑ C1 から C2 へ、大岩は浮石多く歩きづらい



↑ 岩パート終わり、C3 に向かう雪トラバース



↑ C3 からセラック帯を登り出す上野



↑ セラック内の氷の回廊



↑ セラック最後の壁。登ればプラトーだ



↑ クレバスを慎重に避けながら C4 に向かう



↑ C4 から見た C5 への登攀ライン



↑ C5 直下の氷雪壁パート

6. アタック 装備 （B C より上部）

- ・ 装備リストは下記表を参照

- ・ 荷物の重量：BC から上げた荷物の総量は 1 人あたり 23.5 kg。実際には 2 回に分けて荷上げしており、8 泊 9 日でアタック出発の際の重量は 1 人あたり 15 kg ほどだった。

C3 から上げた荷物は 1 人あたり 13 kg

- ・ テント：C2 まではモンベルステラリッジテント 2 型と ESPASE デュオ アルティメイトを使用。C3 から上は重量重視で ESPASE デュオ アルティメイト（フライ無し）と HERITAGE クロスオーバードームを使用

- ・ 食糧：朝食と夕食はモンベルのリゾッタにスープ系や甘いスティックの粉飲料、ナッツなどを追加。スープ系の飲み物は洋風よりも味噌汁やお吸い物が高所ではよかった。また脱水症と食欲低下に備えて OS1 とポカリスエットを持参し、高所での行動水としても、テント内での水分補給にも非常に役立った。

- ・ ギア類：アタック前半の C3 までは岩パートのためカム 2 セットにハーケン & トライカムを持参。後半 C3～は偵察で氷河帯からの突破が可能となったため、ほとんどの岩ギアを C3 にデポした。C3 からの氷河、氷雪壁では状況によってスノーバーとスクリューを使い分けた。また下降で土嚢懸垂を想定していたため、捨て縄は多めに持参した。

- ・ ロープ：50m ダブルロープを 2 セット、セミスタティックロープ 50m を 1 本荷上げした。セミスタティックは F I X 用のためロープ径に迷った。落石で痛むリスクを考慮し 8.0mm と 10.5mm を持参したが、10.5mm は重量的に荷上げが厳しく C1 にデポすることになった。

■BCから上げた共同装備					
		重さ(g)	数量	重量	重量計
登攀具	50mダブルロープ	1,900	2	3800	27.6kg
	50mダブルロープ	2,200	2	4400	
	50mFIXロープ	-	2	7000	
	赤布80cm×20、120cm×10、150cm×5	-	35	2000	
	捨て縄 30m	525	2	1050	
	BDキャメロット #0.3~1&カム	-	2	1400	
	トライカムエボ1セット+ピンク追加1	169	各1~2	169	
	トライカムノーマル青	77	1	77	
	DMMウォールナッツ小	170	1セット	170	
	ハーケン ナイフ	62	7	434	
	ハーケン アングル	80	2	160	
	montbellギアラック	97	1	97	
	アルスン	78	12	936	
	スリング 120cm	73	8	584	
	スリング 180cm	89	4	356	
	スリング 240cm	108	2	216	
	環付きカラピナ	30	8	240	
	スノーパー	300	8	2400	
	スクリュー 14cm	90	4	360	
	スクリュー 17cm	100	5	500	
	スクリュー 19cm	111	2	222	
	スクリュー 22cm	121	4	484	
	マルチフック	40	2	80	
	土嚢袋	30	15	450	
幕営	テント montbellステラリッジ2	1,500	1	1500	9.8kg
	テント HERITAGEクロスオーバードーム	630	1	630	
	テント ESPASE デュオ アルティメイト	1,550	1	1550	
	JETBOILミニモ	480	2	960	
	ガス缶 大	680	6	4080	
	ガス缶 中	380	2	760	
	ライター	20	6	120	
	給水タオル	80	2	160	
他	ツェルト	250	3	750	3kg
	パルスオキシメーター	50	2	100	
	インリーチ	260	1	260	
	インリーチミニ	100	1	100	
	医療キット	500	1	500	
	修理道具(補修&ダクトテープ、針金)	100	1	100	
	スコップ	460	1	460	
	バッテリー(20,000&10,000&5,000mAh)	250	3	750	
合計重量					40.4kg
1人当たり					10.1kg

■BCから上げた個人装備					
		重さ(g)	数量	重量	重量計
登攀具	アイゼン	880	1	890	5kg
	冬靴	1290	1	1290	
	アックス & リーシュ	1300	1	1300	
	ヘルメット	220	1	220	
	ハーネス	300	1	300	
	セルフビレイ用パス & 環付きビナ	100	各1	100	
	タイブロック & 環付きビナ	80	各1	80	
	ナノトラクション & 環付きビナ	127	各1	127	
	ルベルソ & 環付きビナ	119	各1	119	
	ナイフ & 笛	100	各1	100	
ウェア	ビレイジャケット	500	1	500	1.8kg
	行動着 上下		1		
	アンダー 上下		1		
	アルパイン 上下				
	ダウンパンツ		1		
	アンダー 上下(追加分)		1		
	レイン 上下		1		
	パラクラバ、ネックゲーター		各1		
	手袋(ニトリルインナー)		5		
	手袋(アプローチ)		1		
	手袋(アウター)		3		
	手袋(ライナー)		2		
	サングラス(予備orゴーグルも)		2		
生活品	寝袋	898	1	898	1.2kg
	マット	273	1	273	
	水袋	25	2	50	
食糧	食糧 朝夕食		16食	2,150	4.2kg
	食糧 行動食		9食	2,050	
他	ヘッドライト		2	130	1.2kg
	エマージェンシーシート	115	1	115	
	保温ボトル 700ml	320	1	320	
	他(ノート、日焼止め、生理用品)		1	600	
合計重量					13.4kg

■C3 から上げた共同装備					
		重さ(g)	数量	重量	重量計
登攀具	50mダブルロープ	1,900	2	3800	15.9kg
	50mダブルロープ	2,200	1	2200	
	50mFIXロープ	—	1	3000	
	赤布80cm×10、120cm×8、150cm×5		10	570	
	捨て縄 30m	525	1	525	
	トライカム (EVO黒、ピンク、赤)(ノーマル青)	—	4	160	
	ハーケン ナイフ	62	2	124	
	ハーケン アングル	80	1	80	
	アルヌン	78	7	546	
	スリング 120cm	73	4	292	
	スリング 180cm	89	4	356	
	スリング 240cm	108	2	216	
	環付きカラビナ	58	8	464	
	スノーバー	300	6	1800	
	スクリュー 14cm	90	4	360	
	スクリュー 17cm	100	5	500	
	スクリュー 19cm	111	1	111	
	スクリュー 22cm	121	4	484	
	マルチフック	40	2	80	
	土嚢袋	30	8	240	
幕営	テント HERITAGEクロスオーパードーム	630	1	630	5.3kg
	テント ESPASE デュオアルティメイト(フライ無)	1,000	1	1000	
	JETBOIL ミニモ	480	2	960	
	ガス缶 大	680	2.5	1700	
	ガス缶 中	380	2	760	
	ライター	20	6	120	
	給水タオル	80	2	160	
他	ツェルト	250	1	250	2.3kg
	パルスオキシメーター	50	2	100	
	インリーチ	260	1	260	
	インリーチミニ	100	1	100	
	医療キット	500	1	500	
	修理道具(補修&ダクトテープ、針金)	100	1	100	
	スコップ	460	1	460	
	バッテリー(10,000&5,000mAh)	250	2	500	
合計重量					23.5kg
1人当たり					5.9kg

■C3から上げた個人装備					
		重さ(g)	数量	重量	重量計
登攀具	アイゼン	880	1	－	0kg (携行)
	冬靴	1290	1	－	
	アックス & リーシュ	1300	1	－	
	ヘルメット	220	1	－	
	ハーネス	300	1	－	
	セルフビレイ用パス & 環付きビナ	100	各1	－	
	タイブロック & 環付きビナ	80	各1	－	
	ナノトラクション & 環付きビナ	127	各1	－	
	ルベルソ & 環付きビナ	119	各1	－	
	ナイフ & 笛	100	各1	－	
ウェア	ビレイジャケット	500	1	500	1.9kg
	ダウンパンツ	200	1	200	
	アンダー 上下(追加分)	400	1	400	
	バラクラバ、ネックゲーター	50	2	100	
	手袋(ニトリルインナー)		5	50	
	手袋(アウター)	50	2	100	
	手袋(ライナー)	180	2	360	
	サングラス	20	1	20	
	サングラス予備orゴーグル	128	1	128	
幕営	寝袋	898	1	898	1.2kg
	マット	273	1	273	
	水袋	25	2	50	
食糧	食糧 朝夕食		8	1,000	2.1kg
	食糧 行動食		5	1,100	
他	ヘッドライト		2	130	1.9kg
	エマージェンシーシート	115	1	115	
	保温ボトル 700ml	320	1	320	
	他(ノート、日焼止め、生活用品)		1	1300	
合計重量					7.1kg

7. 遠征費用

■支出	金額(1人分)
エージェンツ費用(ポーター/リゾン/ホテル/送迎/追加荷揚げ/手数料)	343,000
航空券(往復)	90,000
食費(BC/アタック/行動食)	28,000
通信費(インリーチサブスク2台/天気予報サブスク)	8,000
装備購入費	116,000
高所順応(低酸素室利用)	35,000
失ったギア(スリング/新規購入ロープ等)	36,000
雑貨(BCでの生活用品、医療品、赤布等のアタック時小物)	13,000
合計	669,000
■収入	金額(1人分)
JMSCA海外登山支援金	73,000
個人からの支援金	18,000
合計	90,000
■1人当たりの負担額	579,000

8. 記録

■順応&荷上げ（鈴木 記）

10/7 曇りのち雨 8:00 BC—13:00 C1(4750)

～曇り空の下 C1 へ～

出だしの渡渉がやっかいだがそれ以外は C1 まで歩き易い登山道のようなところを登って行く。C1 に着いて整地していると雨が降ってきた。テントに入る頃には本降りになり明け方まで降っていた。

テントは C4 までは快適性重視でダブルウォールを 2 張り。この日からテン場整地からの場所取りジャンケンという流れになった。

10/8 晴れのち雹のち満月

7:00 C1—8:00 デポ回収(4260)—10:30 C1(休)13:00 C1—16:00 C2(桑・鈴)

7:20 C1—11:00 C2—13:40 C1(休)13:40 C1—16:50 C2(上・葉)

～2 組に分かれて荷上げ～

桑・鈴→10/6 にデポした荷物(4260m)を回収してから C2 へ。

上・伊→C2 まで 2 往復。

C1～C2 までの大岩歩きがとにかく歩きづらくて時間がかかった。めちゃデカイ岩が動くし雨で濡れると滑るし恐ろしい。危ない。鈴木が激しくコケたがヘルメットのおかげで事なきを得る。ヘルメットは大事だ。2 往復ありがとう！

C2 設置予定の 5000m 付近はあまり良いテント適地がなかったので頑張って整地。水は近くに流れていてラッキーだった。

10/9 晴れ 7:30 C2—下部岩壁—15:30 C3—16:00 懸垂開始—20:00 C2

～下部岩壁の下見へ～

下部岩壁は 9 ピッチ、ロープスケールで 400m くらいだった。スピード、軽量化を考え桑原だけアプローチシューズを履き全リードすることになった。3 人登り+1 人フィックス。自然落石が恐ろしいところがありヒヤヒヤドキドキした。

15 時頃下部岩壁が終わり雪面に出た。時間もないので空荷で上野、伊佐見の 2 人がコンテで 150m 程先を見に行ってくれた。落石をよけれそうなハングした岩の下にテントが張れそうとのことでそこを C3 にしようとなった。

16 時懸垂下降開始、落石に怯えながら C2 まで降りた。桑原がリード&懸垂で大活躍してくれてありがたかった。

10/10 晴れ 9:10 C2—12:00 BC

～ギア等をデポして BC へ～

高度順応もうまく出来ていてみんな元気に BC に戻ることができた。C2 でマックのポテト食べたって言うてるのを聞いてからずっとポテトが食べたくて夕食に芋を揚げた。美

味しかったな～。



↑ 渡渉困難なため投げ石で底上げる



↑ C1 までのアプローチ



↑ C1 の様子



↑ C2 までの歩きは不安定な大岩



↑ C2 を整地中



↑ 南面で脆い下部岩壁



↑ C3 予定地まで雪トラバース

↑ ご褒美のポテトフライ（笑）

■アタック前半 （上野 記）

10/13 曇り時々晴れ 7:00 BC—14:40 C2

～軽快な足取りで C2 へ～

8泊9日の食糧と追加のギア類を持って C2 へ上がった。私と桑原は B C 用のシュラフやダウン上などを用意していたのでそれらを C2 にデポしていたが、伊佐見、鈴村は1つだったのでそれらも荷物に入っている。自分の荷物は軽く感じた。

10/14 晴れ 4:40 C2—14:30 C3

～予定通り C3 設置～

自分が下部岩壁上部をトラバースし下見をして岩のルーフの下が整地できそうなこと、その辺りから氷河が繋がっている可能性があることを提案していたので、本当に整地が可能か、落石の危険はないか、氷河に降り立てるか、若干心配に思いながらスタート。

暗闇の中、下部岩壁に設置したフィックス 3 本を使って登っていく。一応先頭はフィックスに頼りながらも、新しいロープを 1 本使いリードして、中間支点を取りながら進んだ。フィックスに異常ない場合はフィックスも新しいロープも固定して使用したが、2 本目のフィックスは落石で破断しかけていた。3 本目のフィックスの振れ止めに使っていた中間支点の 60 センチスリングも切れていた。改めてこのラインの落石がやばいことを感じた。

下見時と同じ人がリードの方がスムーズだろうということでまた桑原全リード。リード用のアプローチシューズも桑原のみ持って行った。フォローは前回と違って食糧燃料氷の装備、赤布などの邪魔モノも多いので毎度息絶え絶えユマール。それでも下見の経路通り、C3 設置予定地に 14:30 頃到着。ここで最後尾だった桑原が手の甲に落石を受ける。とりあえず荷物を置いて最終ピッチの雪上トラバースを空身で来てもらい、C3 で様子を見た。手の甲は出血しているだけでなく腫れているように見え、骨折した可能性があると思った。C3 の整地は残りの 3 人で行い、1 時間ほど整地してなんとか 2 張のテントを張れる縦長スペースを確保した。

11/15 晴れのち曇り 8:00 C3—12:30 雪原上—15:30 C3

～勝負の 1 日～

進退を決める 1 日だ。桑原の手の状態もだが、ここで氷河ルートが取れなければこの先に進むのはかなり難しいと思った。この日はまず上野と鈴村の 2 人で氷河ルートの偵察をして、繋がっていなかったら戻って伊佐見と上野で上部岩壁ルートを偵察に行く予定だったが、上部岩壁は下部より立っていて時間がかかりそうなこと、引き続き落石リスクがあること、上部岩壁から氷河へ移れるか不明なこと、などの不安要素が多いと感じていた。そういうことからできれば氷河ルートから 5800m のコルを目指したかった。C3 からすぐ横のセラック群の上では氷河が綺麗に繋がっていて、その上に乗ってしまえばスムーズにコンテで歩けると予想してスタート。

1 ピッチ目はすぐ横の氷河は下見時に通れそうだったがよく見ると下が空洞のように思

えたので、一度降りて迂回し、登り返して空洞（？）氷河の先まで。ここで C3 と同じくらいの標高である。そこからは少し安定した氷河を歩き、底のあるクレバス（氷の狭い回廊）をトラバースし、また歩き。3 ピッチ目は幅 1 m ほどのブリッジ（でも下はちゃんと底についている）を渡り、スクリューが良くきく豆腐のような四角い氷河でピッチを切る。フォローの鈴村がどうやって渡ったの？！と聞いてくるが、「カウボーイだよ！」と答える。4 ピッチ目はルート取りに迷い、一度下って戻ったりした。豆腐氷河からすぐ横に鋭いリッジが続いていて、3 m くらい登ってリッジの向こう側を見ると、雪原の末端と思われる地形になっていた。リッジから下は 10 m くらい切れ落ちているが、底は広がっていてその谷地形を辿って上がっていくと垂直の 20 m のクライミングで空に届くようだった。鈴村にも見てもらい、このリッジをトラバースして懸垂すればあの氷河末端（？）までは至れるだろうと合意。4 ピッチ目はリッジのトラバース。そこから懸垂して、20 m 垂壁の取り付けまで。5 ピッチ目はもうこの上が雪原上だろうと望みをかけて、空身で登った。その上に想像した景色が広がるのか、苦難のセラック帯がまた続くのか、先が見えない不安と興奮を感じて登った。身体は想像よりも軽く、標高 5500 m でアイスクライミングしているとは思えなかった。雪と空の境界へアックスを伸ばし、体を上げると、平らで広大な雪原が広がっていた。雄叫びをあげた。そこからはなだらかなスロープがおそらく 5800 m のコルまで続いていた。

2 人で雪原に上がり、スノーバーでフィックスを設置。その後もアバラコフを作ったりフィックス張ったり、明日の登攀と数日後の下降に備えて下山した。下山後、桑原はアックスを握ったりはできるのでアタックを続行しようということになった。氷河ルートが拓けたことで、岩ギアを大幅に厳選してトライカム 4 個、ピトン 3 個に縛ることができた。

10/16 晴れ 6:00 C3—11:00 雪原上—17:00 C4(5820m コル)

～何度も想像した 5820m コルへ～

上野と鈴村で 30 分ほど先行して、ロープを固定しながら進む。ほぼ昨日のルートと同じだが、豆腐岩からはリッジをトラバースするのではなく、リッジを乗越して懸垂、氷河の谷に降りて歩いた方が楽だろうという鈴村の提案でそのようにルートを取る。順調にロープを設置、アバラコフや捨て縄の設置をして先頭の私は 9:30 には雪原上に到着。後発 2 人は赤布を差しながらユマールで進んだ。これまで完全なお荷物&外付けなのでかなり邪魔だった赤布を使えるのが嬉しい。11 時には全員雪原に上がり、その後は 2 人 1 組でコンテで進んだ。ロープは 4 本持っているの、少々邪魔だが安全度が高いのでロープ 2 本でコイルを巻き、コンテした。1 人 1 本のスノーバー、2 本のスクリューを携行した。伊佐見・桑原ペアが先行し、クレバスが見えたところ、急なところなど、所々スタカットに切り替えたが、概ね歩きでコルまで行けた。

目の前に巨大な三角形のミニヤコンカ、右手にロンシャンがどんどん近づいてきた。私が最初にこの山の計画を作った時に、この 5800 m のコルまで 4 人元気に至ることは簡単ではないだろう、逆にここまで元気に来れたなら、山頂にも手が届くかもしれないと思っていた。日本で何度もこの場所へのルート取り、ここから見える景色、ここから山頂への登路を想像してきた。その想像上の場所に今 4 人で元気に存在することが少し不思議で、嬉しかった。



↑セラック帯と岩壁の隙間に設置した C3



↑セラック内の氷の回廊



↑セラックの背後には美しい高峰



↑セラック 5P 目の 20m 垂壁



↑セラック帯を抜けると広い雪原



↑雪原上からはコンテで進む

■アタック後半（桑原 記）

10/17 晴れのち曇り 7:40 C4—16:30 6200 付近から下降開始—19:30 C4

～6230 コルを目指し偵察～

今日の行動は鈴村を除く 3 人で南稜コル 6230m までの偵察を行う。上野も連日行動していたのでレスト日にしたいところだったが、桑原と伊佐見の 2 人だと心許なかったこともあり、ついてきてもらうことになった。この日、上野がレストできなかったことで疲労がさらに蓄積し、後々の体調に影響してしまったかもしれない。

初めの 1 時間くらいは、緩い雪斜面をコンテ。途中傾斜が少し強くなるあたりでスタカットに切り替える。伊佐見がリードで雪壁 2 ピッチ、アイス 1 ピッチに行く。その後はまたコンテで行ける雪斜面。6080m 高度障害で伊佐見が遅れ、その地点で待っていると言う。分かれていいものか少し迷ったが、見える範囲での別行動になるので、ここから先は桑原と上野 2 人で進んだ。初めはコンテ。そのあとスタカット 2 ピッチで南稜コル 6230m の直下まで。

あと 1 ピッチで南稜コル 6230m まで行けそうだったが、南稜コルまで行ける道筋が見えたこと、この時点で 16:30 くらいだったことから、引き返すことになった。引き返しはクライムダウンと懸垂。明日のことを考え、ロープを少しフィックスしておいた。

帰ってくると、鈴村がテンバの整地をしておいてくれた。テントの張り直し、スコでのブロック作り、とても大変だったと思う。ありがたい。昨夜とは打って変わって、風が不快ではない夜を過ごすことができた。

10/18 曇りのち晴れ 8:00 C4—17:30 C5

～いよいよロンシャン稜線に～

寒い夜だった。みんな少し疲れ気味。

1 泊 2 日の装備を背負って、昨日と同じルートを辿る。この高度になると、なんともない雪斜面でも、息が上がって歩行が遅くなる。今日は南稜上の偵察も少ししたかったが、時間的に無理そうだ…。15:00 過ぎに昨日の最高到達地点に到着。最後のアイスクライミング 1 ピッチは、雪が氷の上に乗っており、プロテクションがとりづらいピッチだったが、鈴村がリードを担当してくれた。ビレイ中に、上野と明日の行動について少し話した。1 泊 2 日装備しかないが、上野は 2 泊 3 日になってもいいからピークへ行きたい、と話しており、ピークへの熱い思いを感じた。

私が稜線上に到着したときの気持ちは、到着した安堵というよりも、焦りだった。Longshan 側の進むべき方向には、大きな岩が立ちはだかっており進めないように見えるのだ。下からもこの岩は見えていたが、岩の脇に雪がつながっていて脇を進めるだろうと思いこみ、それを疑わなかったのが問題だった。強まる風と低くなる太陽とが相まって、絶望感が強くなった。私たちのこれまでの行動速度と疲労具合とを考えても、ここからルートを修正してピークを目指すのは難しそうだと思分みんな思っていた。

誰も明日の行動の可能性について断言しなかったが、とりあえずコルにテントを張ることにした。サラサラの雪をスコップひとつでブロック状に積み上げ、なんとか西寄りの吹き上げ風を防ぐ。2 張分の整地をする気力がなく、2-3 人用エスパーステント 1 張に 4 人が入った。狭いテントは苦手だが、この日は、あまり気にならなかった。

この夜中に上野が「寒い、脇の裏に黒い斑点が見える」と言って、体調不良を訴えた。

上野は BC 出発からレストせずに連日頭と体をフルで動かしていたが、ついにそのツケが回ってきていた。ここまで、弱音もほとんど吐かなかったリーダーの体調不良は、パーティとしても少し不安になった。



↑ 右が登る冰雪壁、奥に立派なミニヤコンカ



↑ 雲海に沈む夕日



↑ 鈴村が積んでくれたブロック



↑ 中間部の台地



↑南稜コル直下をユマールする桑原



↑6230 コルに立ちはだかる岩壁

■下山 （伊佐見 記）

10/19 晴れ 10:30 C5—16:00 C4

～敗退決め C4 まで下山～

何時だったか、朝日に照らされて目が覚める。6230m に張ったテントから顔を出すと、絶景が広がっていた。よく考えたら 6000m でご来光！なんて贅沢はそうそうないのだけど、単純に「キレイ」と一言で喜べない空気がどこかにあった。そう、昨日私たちは苦労してここまで登ってきたが、目の前の岩壁に阻まれて山頂を諦めたのだ。すぐに下りずにここに泊まることに決めて、「明日余力があったら南の朱山北峰を踏むのもありかもね」と話していたが、いつの間にか私たちは下りることを決めていた。みんな疲れていたし、昨晚からオハル（上野）の目には“黒い斑点”が見える高度障害が出ていた。これ以上続けたら危ない気がした。

テントを片して土嚢懸垂で降りる。行動を下げるにつれ私は一人元気だった。というか、昨日は高度障害で上部では使い物にならなかったのだから、「疲れてなかった」といった方が正しい。なんだかむなしかった。C4 までの下降は懸垂 8 回と歩きで。概ね順調だったが途中スノーボードが破断しかけた時はヒヤッとした。それからアックスを落としたり、ロープを落としたり、メンバーのミスが連発、、やはり疲れていたのだろう。ちょうど陽が山の陰になり始めた頃 C4 に下山。疲労と寒さの中順番で水を作ってテントに入った。

（懸垂支点は①土嚢②アバラコフ③アバラコフ④スノーボード→土嚢⑤土嚢→歩き⑥土嚢⑦アバラコフ⑧土嚢）

10/20 晴れのち雪 8:00 C4—9:00 プラト—上の懸垂地点—10:00 懸垂開始—15:00
C3—16:00 C3—22:00 C2
～C4 から C2 へ、困難の多かった下山～

だっ広いプラト—を、赤布を回収しながら降りていく。登ってきた時はあんなにハーハー息を切らせていたのに、下山は気が抜けるほどあっという間だ。出発から1時間後プラト—終点の懸垂ポイントに着いた時は、お昼前にはC3、くらいに考えていた。一息ついてオハルが懸垂ラインを見るためロープを付けて氷河下を覗き込む、、、しばらく無言。「ん？ここだったかなあ。懸垂ラインがよくわからなくて。鈴さんも見に行ってくれない？」と戻ってきた。見に行った鈴さんが、「登ってきた時と氷河が変わってる！ここからは降りられないかも。汗」そう、あまりの変貌ぶりにすぐ何が起きていたのか分からなかったのだが、私たちが登って来た4日前のセラックが崩壊したのだ。雪壁の弱点が無くなり、50mほどの切れ落ちた雪壁と雪壁の間に2～3mほどのギャップができていた。はっきり言って絶望的。一瞬ヘリを呼ぶならここしかないなあ、なんて弱気な考えが頭をよぎる。4人で話し合い、20mほど下りた足場から向こう側に渡ることができるか、とにかくやってみようということになった。スノーバーを3本縦埋めして強固なアンカーを作り50mロープ1本をFIX。桑ちゃんが空荷で先行することになった。ここからは桑ちゃんスーパームーブ炸裂！！右足キックで向かいの壁にアイゼンで蹴りこみ、何とかパツパツでスクリュ—を打ち込む。懸垂しながらでバランス悪かっただろうに、よくやってくれたものだ。（後で動画を見て感動！）アンカー補強のため離れた場所にいた私から、桑ちゃんの姿は見えなかったが、上から見守っていた鈴さんの「ガンバ！」とか、「ナイス！！」とか聞こえるたびに、気合いムーブが繰り広げられていることが伝わってきた。

4人がここの懸垂を終えても崩壊箇所が続き、アバラコフでの懸垂下降と登り返しをしなければいけなかった。懸垂した氷河の谷底から上部を見上げると、不安定な巨大ツララが今にも落ちてきそうだ。先に行ったオハルが「谷底が危険すぎる！とにかく早く登り返して！」と叫んでいる。本当に緊張した時間だった。この後の懸念していたスノーブリッジは落ちずに残ってくれていて、無事C3に戻ることができた。それにしてもたった4日でここまで崩壊が進むとは、、セラックのリスクは全く読めない。

さて、クタクタでC3に辿りついた私たちにはデボした岩ガチャが待っていた。時間は3時だが、明日の行程を考えるとやはり下りなければいけない。さらに荷物を積んで再び下山を開始し、岩パートに入るためアイゼンを脱いで準備をしていた時、上から落石。「シュルシュルシュル、ヒュー————ン、ゴーン、ガシャーン！」数分おきに降ってくる岩が壁に当たって砕け散り、私たちのいるすぐ上をかすめていく。南面の脆い岩場なので想像はしていたものの、さすがにこれはまずい。身を隠すように岩壁にぴったり張り付いて4人で話し合った「この状態で降りるかどうか。」

「夜を待って下るべき」「暗い中アンカーを設置しながら下降ラインを見つけるのは難しい」「そもそも今いる場所も、C3へ戻るラインも安全ではない」「下降をさらに右にとって落石から遠ざけるか？」アルパインをやっている限り、必ずどこかにリスクはある。どう判断して、無事に下りてくるか。下りるか、やめるかさえ決まれば後はベストな方法を話し合えばいいのだが、ここでは本質から完全に意見が割れてしまった。4人の気持ち

を揃えるのは簡単ではなかった。それでも話し合って下りに決めた。

さて下りるからには気持ちの切り替えが必要だ。下降を開始する前に4人で注意点を言い合わせた。

- 1 素早く降りること
- 2 常に1人は上部に注意を向けて落石が来たら叫ぶ！
- 3 アンカーは4人全員で確認し、1人目はバックアップを取ることに

幸い、頻発していた落石は陽が傾くに従って静まった。残り2ピッチ、登りに設置したフィックスロープまで下りてきたところにはヘッデン行動になった。でもあとは慎重にC2まで下るだけだ。最後の1ピッチ、クレバスが散在するデリケートな懸垂だが、「これでもう終わり」という逸る気持ちがあった。先行した桑ちゃんを追って、私がおり始めたその時、大きな浮石を踏んでしまい身体が傾いた、、と同時に上に乗っていた大岩が均衡を失って右足に積み重なるように落ちてきた。

「やってしまった。最後だったのに、、」真っ暗だったためほかのメンバーからは何が起きたのかわからなかったのだろう。ただ落石が起きたという事実と、私の悲痛な呻き声にびっくりして、下にいた桑ちゃんが上がってきて、積み重なった岩をどけてくれた。

「最後だったのに、、」は「最後だったから」の間違いだ。こんなところでやらかすなんて。悔しさでいっぱいだった。

10/21 晴れ 11:00 C2—15:30 C1—18:00 BC

～BCへ下山～

今朝目を覚ますとテントの外が一面白くなっていた。そう、昨晚やっとの思いでC2にたどり着いた時、ちょうど小雪が降ってきたのだ。考えてみると順応含め行動日に天候不順で行動を制限されたことは一度もなかった。そしてこの日もこのタイミング。今回はかなり天気恵まれていたんだなあとしみじみ思う。昨晚は翌日の起床時間も決めずに眠りについた。みんな疲れていたし、やっとな安全地帯に下りてきた安堵もあった。

さて、私の足は？痛むけどロキソニンを飲んだら歩ける。不幸中の幸いで骨折はなかったようだ。とは言え、今日はすべての荷物をBCに降ろさないとはいけず、4人でさえ「往復か、、？」と話していたのに、私の分までみんなに担がせることになってしまった。重さもだけど、嵩もかなりあったので、みんなそれぞれメインザックに何かしらくりつけようような形での下山だった。荷物が重すぎたのと、9日分の疲労、私のケガ足などあり、何度も休憩を挟みながらゆっくりしか歩けなかった。C2を出るころBCにいるトゥルース（リエゾンオフィサー）とやっとな通信できた。数日交信できていなかったのが心配していた様子だったが、私たちの無事を知り安心したようだった。私はC2から下山を開始したこと、下山には時間がかかるが今日中にBCに下りることを伝えた。ついでに、、、「夕食作ってくれたら嬉しいなあ」とも。笑

C2からの下山で一番懸念していたのはBC直前にある最後の渡渉。氷河から流れ出る水流のため毎度午後になると嵩が増し、帰りの方が危険だ。何とか暗くなる前に無事渡渉を終え、BCに到着。トゥルースが私たちを迎えてくれた。美味しい夕飯とともに！笑



↑ C5 からの朝日



↑ C4 へ土嚢で懸垂する



↑ 崩壊セラックへの桑原のスーパー懸垂ムーブ

9. 参考情報

> 遠征本番までの過程

今回の遠征準備の時系列は大まかにこのような感じだった。

2024 年 1 月 スークーニャン全山縦走計画立案&メンバー探し

2024 年 4 月 メンバー決まり、スークーニャン資料集め、情報収集

2024 年 12 月 黄連谷左俣、八海山ハッ峰（伊佐見、桑原、鈴木）

2025 年 1 月 遠征計画書共有

2025 年 3 月 大内尚樹さん宅訪問（スークーニャン遠征が白紙に）

2025 年 4 月 利尻南稜（4 人全員）、ミニヤコンカへ転進決定

2025 年 5 月 三ッ峠でロープワーク確認

2025 年 5 月 エージェントは Masherbrum に決定

2025 年 6 月末 前金 1000 元の入金

2025 年 7 月頭 Longshan の許可が下りる、航空券購入

2025 年 8 月 インドのラダックで順応登山（上野、鈴木）

2025 年 9 月 雲南省の山で順応登山（桑原）

> 登山時期と気象

ミニヤコンカ山群は 9 月まで雨季で 10 月に天気が安定する。数年前に山火事があったことから本格的な乾季である 11 月以降は現在閉山となる。今回は中国ビザ免除措置の上限 30 日内で天候の安定した 10 月を遠征期間とした。

入国して入山までは雨季の残りで雨が降ることが多かったが、BC に入ってから雨は急速に減っていった。昨年と比較しても降水量が少なく、安定した年だったと言える。実際に雨予報でも行動中は降られることが少なく、行動への影響は少なかった。

BC~C2 はバワンゴウという谷にあり、午後になると谷に雲が集積され夕方~夜は濃い霧となることがしばしばあった。BC では小雨、C2~は雪であることが多かったが、滞在中にまとまった降雨となることは一度もなかった

なお、BC 入りしてからの天気予報は日本の本部から毎晩「mountain-forecast.com」のミニヤコンカ 6,000m 地点の短期予報(※)と長期予報(※)を送ってもらい、翌日以降の行動計画を立てた。

(※)短期予報：送信日の翌日以降の 4 日間、時間ごと（AM・PM・night）の天気、風速風向、降雪量、最低気温

(※)長期予報：送信日の 5 日後~9 日後、5 日間の風速、降雪量情報

> エージェント

エージェントが決まらないことには実質遠征準備は始まらない。まず李慶さん（大内尚樹さんがいつもお願いしているとのことでご紹介頂いた）という中国人、2020年のスークニャン下見の時に宿で知り合ったスークニャン山域の個人ガイドにも見積もりをお願いした。が、どちらもロンシャンで許可が取れるかはっきりしなかった。そこで、ネットで調べると一番目立つ Sichuan Mountain Guide というガイド会社にメールしたが返信がなかった。最終的に目的となる山域がスークニャンからミニヤコンカエリアになったこともあり、ネットで調べてよく活動していそうな成都拠点のガイド会社の Masherbrum をお願いすることになった。なんの前情報もないし、最初はかなり心配だったが、一貫して連絡を取っている担当者のタンさんの返信が速く、準備の進め方も的確だと感じ、もはや前金を支払った6月末の時点ではこの人は信用できる、という感触だった。見積もりも自分たちの想定より安く、空港への送迎やピーク料金も含めて4人で120万だった。今どき1ヶ月の遠征で50万を切るのも珍しい。通訳は要らない、コックは要らない、など、私たちの細かい要求にも対応してくれた。

実際に会って話してみると、タンさんは10人くらいの社員のマシャブルムにおいて事務関係と登山のガイドもやっている、山好きのおじさんだった。成都の最後の夜などは私たち4人以外にもリエゾンを務めてくれた若者2人、もともとリエゾンになる予定だった女性（骨折してしまい不参加となった）を呼んでくれて高級な中華を奢ってくれた。しかも、私たちが最後ポーターが増えた分少し増加した料金を支払おうにも現金が足りなかったのだが、「アルパインクライマーはみんなお金がないよね」って追加分はいらないよと言ってくれた。なんだか少し心配になるくらいただの良なおじさんだった。急遽リエゾンを担当することになった25歳の若者2人も、それぞれ優しくて気の利くナイスガイだった。

> 中国での物資調達

今回は1人23キロ×2、手荷物5キロの約50キロの荷物を日本から持参した。サポート役として中国に来てくれた上野妹に23キロの荷物も持ってもらい、4人の合計荷物は220キロほどだった。それ以外にBC用のフードボックスや水を濾過するためのバケツ、圧力鍋、フィックス用のロープなどは中国のamazonのようなサイト「タオバオ」で購入した。中国に口座のある妹に購入してもらい、とても助かった。タオバオは日本でも商品を見て選ぶことはできるので、成都の大型スーパーなどでも入手困難なものはエージェントの中国人を介しても購入をお願いできると思う。注文した商品は成都のホテルに配送してもらった。

> 中国での通信機器

中国では基本的にGoogleやLINE、FBやInstagramは開けない。これまではVPNのアプリを入れてLINEなどを使っていたが、今回初めて日本で事前に中国国内用SIMを購入

していった。「ジョイテル 中国どこでも SIM」という商品だが、中国の通信制限を受けず、VPNを経由せずにLINEなど使えた。8日間で1200円くらい。今後は絶対にこれが便利だろう。

> 衛星携帯と無線

今回はBCにいるリエゾンと隊のやり取りに小型無線（エージェントから3台貸与された）を使用、リエゾンは成都にいる本部（タンさん）と衛星携帯で通話、本隊と日本の本部はインリーチ、インリーチミニを使ってテキストでやり取りした。中国の小型無線はBCからC2までは交信できた。リエゾンの持っている中国の衛星携帯はインリーチよりも二回りくらい大きかったが、中国の携帯に全部電話できるとのことだった。中国ではインリーチの持ち込みや使用に制限があるのか等、心配していたが全く問題なかった。ただし、どの地域での利用もそうであると思うが、インリーチとインリーチミニでのやり取りはメッセージの送受信にタイムラグがあるため、無線のようなリアルタイムの交信という使い方はできなかった。

> 中国元の用意や支払い方法

エージェントに支払う120万のうち1000元（22万くらい）は事前に提示された口座に振り込み、残りの100万は現地でタンさんに手渡しした。今回初めて「外貨両替ドルユーロ」という外貨宅配サービスを利用して、とても良かったので紹介したい。これは50万以上の両替だとレートが安くなったり、10万円以上だと送料は無料だったり、何より現金100万を持って日本の両替所に行くとか、中国で両替所を探すとかの手間がないし、レートが良かった。指定の口座にまず両替したい分の日本円を振り込むのでかなり怖いけど、口コミなど調べまくり安全な外貨宅配サービスだと判断して利用した。大きな額の両替にはとても良かった。

中国では現金の持ち込みは1人20000元（44万くらい）までが申告不要なので、その両替した元は東京から出発する3人で分けて持った。

> 中国でのクレジットカードの利用

中国はキャッシュレス決済が国民に浸透しており、年配の人もスマホで決済するし、八百屋でもキャッシュレス決済できるのだが、クレジットカードはあまり利用されていない。カードはかなり大きい店しか使えないので外国人である私たちは基本的に現金を持っていないと不便である。ATMでのキャッシングも、4人の持っている数枚のカードで誰も引き出せなかった。中国版LINEのようなWe Chatという通信アプリについているWe Chat Payは日本でカードと紐付けていけば中国で使えた。（ただし、試しに日本でWe Chat Payで決済しようとしたらできなかった。

> 高所順応について

今回は登山期間が短いことから、順応については遠征以前にある程度行う必要があることを4人で話していた。上野、鈴木は8月の2週間でラダックの山に行き6100mを踏み、桑原は9月に雲南省の山で5400mのピークに登った。伊佐見はヨーロッパアルプスで8月に4000mでの宿泊を何度かしていた。そのほか、東京近郊の上野、鈴木、伊佐見はミウラドルフィンズで2日間4000~6000mの低酸素室に入った。低酸素室での経験は順応に直結するものではないが、呼吸法や血中酸素濃度の上げ方などを教わり役立ったように思う。

登山の行程を組む作業は中村進著「海外登山 Expedition」、山本正嘉著「登山の生理学とトレーニング学」などを参考に行った。

> 氷河の水

BCの場所はバワンゴウ氷河から流れる川の脇に設置したため、調理や行動水にはその水を使用。氷河の融解水はかなり濁っているため、浄水するために以下の方法を行った。

【浄水方法】

・ステップ1) 事前の沈殿

20Lの水タンクに川の水を汲み沈殿させて大きな砂やシルトを除去

・ステップ2) プレフィルター

浄水器フィルターへの負荷を軽減するため、布+キッチンペーパーで目立つ粒子を除去

・ステップ3) プレス浄水器

浄水器を使用して浄水する

なお、浄水器はGRAYLを2種類、Sawyerを2種類使用。

GRAYLは数回の使用で目詰まりを起こし使用できなくなってしまった。一方Sawyerは目詰まりを起こしてもキットを使用して洗浄できるため非常に便利。ただし、プレスするための水袋には圧がかかるため痛みが早く、予備があるといい



> BC食

・通常高所での遠征ではコックを雇うことが一般的だが節約するため自炊をした。毎日1~2時間の時間がとられるが、好きなものを食べられ、一緒に調理する時間は楽しかった。持っていける食材に限られる分、調味料関係はバリエーションが多い方がよかった。

・圧力鍋の使用

BC標高である4000mでは沸点が86~87°Cほどにしかならないため炊飯や麺をゆでる際に火がしっかり通らずうまく炊けない。圧力鍋を使用すれば内部の気圧を上げ沸点を高く保つことができるため今回の遠征で使用した。購入はタオバオ(別記)で4000円ほど。実際

に米も麺も美味しく調理でき、燃料節約にもなるため必携アイテムだった。

・食材の例

■日本から持参				
主食	生米	うどん乾麺	パスタ麺	袋麺(ラーメン)
調味料	塩、コショウ	出汁粉末	鶏ガラスープ	マヨネーズ
保存食材	梅干し	あさり缶	コーン缶	シーチキンのパウチ
	乾燥ワカメ	乾燥野菜	天かす	
予備用	α米	フリーズドライ親子丼	フリーズドライカレー	
飲み物	お茶類	コーヒー粉	スープ類	甘い粉ドリンク
■現地買出し				
	生鮮野菜	フルーツ	加工肉	卵

・BCでの食事の例



>燃料について

当初はBCではホワイトガソリンとMSRストーブを使用、BC上ではガス缶とジェットボイルを使用する計画だったが、中国では液体燃料は一般的でないらしくタオバオを使っても入手が困難だった。そこでBC用に金字塔(PYRAMID)という中国メーカーのガス缶大を10個、アタック用にFMS G2G5という韓国製のガス缶(大12、中6)を購入した。山中22日で2割くらい余ったので、余裕があり適量だったと思う。入山日にポーターがガス缶2個を川に落としてしまっていたので、そのような紛失も考慮した方が良いだろう。FMSは6000mでも問題なく使えて、特に日本の雪山と比較して燃料の減りが早いとも感じなかった。4人で朝夕の食事、テント内でのお茶、行動水を雪から作るために(1人3〜4リットルくらい)1日大1缶で余裕があった。

>中国人と接してみても

9月の日本出国時にも現在は反日感情が高まっている、という報道があったが、実際は成都からミニヤコンカの近くのチベット族の村に至るまで、中国人から敵対的な感情を向けられることは一度もなかった。現在は9月末時点よりもさらに緊張感が高まっているが、日本で報道されている中国の北京や上海の市民の声と、中国の内陸部に住む人々(漢民族以外の少数民族やチベット系の人も多い)の声は少し違うのではないかと感じる。どちらかというと、日本人の方が、中国人に対してマイナス感情を抱いている人が多いように思う。今回はスーパーや飲食店など、いろいろな場面で親切にしてもらったし、タクシー内で日本語で話していると無愛想な運転手が急に気さくになって「日本人なの? こんにちは!」と話しかけてきたり、スタバで注文しようとしたら、「日本人ですか、私うまくな

いんですけど日本語勉強しています」と小声で話しかけてきたり、日本人とバレても嫌な
思いをすることはなかった。

10. 遠征を振り返って思うこと

■上野

標高 6230m の稜線に張ったテントの中で、私は溢れる感情が抑えられず、声をあげて泣いてしまった。この 1 年、人生で一番頑張った。エネルギーを注いできた。その目標が達成できないと分かって、これまで張り詰めていた緊張の糸が切れてしまった。

私たちが 50m のアイスクライミングで最後のルンゼを登りロンシャンへ続く稜線に出てみると、そこには 20m の岩が突き出していて、そのたった 20m の岩壁が越えられずに、私たちは撤退を決めた。岩の両側は切れ落ちていて、左右に回り込んで回避することもできなかった。

前日の下見でここまで登って来られていたなら、このルートが繋がっていないことが分かって今日は別ルートを選択できたかもしれないのに。明日途中まで下降してまた別ルートからロンシャン南稜に出て山頂を目指すか？そんなことは残りの未知のロンシャン南稜の標高差 400m が待っていることを考えると非現実的で、敗退を決めた。

その夜、夜中に目を覚ますと私の視界に影というか砂嵐のようなものが見えるようになっていた。決定打は敗退が決まった絶望感だが、思えばこの日は朝の歩き出しから疲れていた。もう湧き上がるエネルギーがない、身体に異常が現れている、ものすごく疲弊した状態だと自覚した。（帰宅して眼科に行ったが、網膜に血が溜まって黒い影のように見えるということだった。1ヶ月ほどで血が吸収されて自然治癒するそう。泣いたことで眼圧が高まったことも原因とのこと）

8泊9日の中で私だけがレストなしで全日行動となってしまったので負担が大きかったと皆が慰めてくれるが、やはり最後の C5 到達日にあれほど疲弊していた最大の原因は BC 環境の過酷さ、入山日数の少なさが原因だと思う。

BC は岩のゴロゴロした谷で整地できる場所が限られており、毎度テント場から少し離れた水場まで水を汲みに行く必要があり（桑原がよく人知れず水を運んでくれていた）、さらにそれは濁った氷河の水のため浄水もマストだった。食事作りは良い息抜きにもなった面もあるが、綺麗な水を作るまでが何しろ大変で、この部分の労力はコックがいたら随分違ったのだろうと思う。前回のインドヒマラヤ遠征ののんびり本を読んだり昼寝したりしていた BC 生活とは雲泥の差であった。

私たちは当初入山期間 22 日の中で 2泊3日で 5800m までの下見と順応、5泊6日でアタックという計画をしていたが、実際は現地での状況を見て、3泊4日の下見、8泊9日のアタックという計画に変更していた。そして実際にその通りの日程で登山を行った。日程の都合上、下見登山とアタックは 2 日しか空けられなかったため、明らかに疲労が完全に取れていない状態でアタック開始となってしまった。

今の自分は登れなかった悔しさと無力感で、なんとなく暗い日々を過ごしているが、まだどこからか風が吹いてきて、燻った炎が燃えだすのかもしれない。ロンシャンについては、もう一度行きたいという気持ちと、もうこんなに頑張れないという気持ちがあり、こ

れから自分の向かう先はわからない。私の娘は遠征時期にちょうど1歳で、それほど物事もよくわかっていないから1ヶ月も不在にできたが、これから言葉も獲得し、私が遠出しようものなら引き止めるだろう。自分と子どもの調整については今後大きな課題になるが、幸い私には私の腹が決まれば協力してくれるパートナーがいる。今回も、インドの2週間、中国の1ヶ月と、子育てを一手に担ってくれた夫と義母には本当に感謝しかない。女性が海外遠征に挑戦していくには、「子育ては女性の役目だ」という古い固定観念にとらわれない周囲のサポートが必要不可欠である。

最後に

妹が中国の大学にいた縁で四川や雲南の山に訪れたことのある私が計画した遠征だったが、最初の1センチを私が動かした後は、ずっとみんなで車を走らせてきた。2025年の年明け以降は月に1、2回ミーティングをして4人で準備を進めた。リーダー的に言わせてもらおうと、本当にみんなよく働いてくれたと思う。私が子育て中でミーティングに遅れたり、途中で退出したりすることもあったが、3人で全部うまく進めてくれた。それぞれが私にない能力を持っていて、私は信頼して彼らの働きを見ていた。何か意見がぶつかることがあっても、基本的な信頼があるので、折り合いをつけて折衷案を創っていくことも難しくなかった。この1年、私と長いドライブを楽しんでくれてありがとう！目的に至れなくても、その道中もみんなのおかげで楽しいものになりました！

そして妹の萌、萌が私と同じ大学探検部に入って最初の年に行ったシルクロードの探検、それが波及して、ついにはこんな計画になってしまったよ。萌や萌の周りの中国人の仲間達のおかげで私はこんなにも中国の山を好きになったと思う。本当に謝謝～！

■桑原

この遠征に誘われた時点では、私は3200mが登山の最高標高でした。夏に富士山に1泊2日で行き3700m付近で1泊、遠征前に中国のMt.Haba(5396m)に2泊3日で行き、4000-4200mに2泊しました。私の高所の経験はそれだけでした。

リーダーが決めてくれた高所順応計画に従い順応を行うことで、ひどい体調不良にはならず4人で6230mまで到達できたことは、大変良かったです。とはいえ、高所での息苦しさや頭痛、4人パーティという難しいパーティ構成から、行動が遅くなってしまったことは否めず、敗因のひとつだったと思います。

今回、先のルート取りが見えない中での装備選定や、食料計画など、沢山考え、パーティのメンバーから学ばせてもらいました。次の遠征の予定はありませんが、この経験が今後の人生のどこかで生きてくると嬉しいです。

メンバーはもとより、金銭的なものも含めた支援や、天気や中国国内の情報提供などをしてくださった知人には本当に感謝をしています。また、現地でのエージェントや、リエゾン、ポーターのサポートはとても親切で、心温まりました。ありがとうございました。

■伊佐見

山を始めて10年とちょっと経つけれど、これまで高所での登山にも、未踏峰にも興味とか憧れがなかった。そんな私が今回6,648mを目指すことになったのは、一番の山仲間であるおはる(上野)から「行かない？」と声がかかったからだった。おはると出会って

から 8 年ほど、同い年の女子なのもありとにかく話が合い、八ヶ岳の冬のアルパインから、GWの前穂、南アルプスの沢、早春の谷川などなど二人で色々な場所に行った。そして大学時代から山岳部で経験を積んでいた彼女は一番近い山の先輩でもあった。そんな彼女が数年前から中国の山に興味を持っていたのは知っていた。「妹と中国の山に行ったんだ」とか、「スークーニャンって山があってその縦走をしたら面白いんじゃないか」とか。今考えてみたらおはるの仲間集めの作戦は数年前から始まっていたのかもしれない（笑）ということで私はこの遠征に参加することにした。しかもメンバーは最近一番一緒に登っている鈴さん（鈴村）と、北海道の強強女子と言われている桑ちゃん（桑原）。このメンバーでデカイ山にチャレンジする、というだけでも楽しそうだ！私にとっては初めての 5,000m 以上、そして初めての中国だ。

正直、準備はなかなかの労力だった。登る山とルート、装備、パーミッションとエージェント、決めなきゃいけないことは山積みで平日の夜に頻繁にオンラインミーティングをした。そもそも途中で登る山が変わった時は、「どーするん、、、？」という感じだった。それでもなんとか準備を進めることができたのは「メンバー全員が積極的に計画段階から参加する」という思いがあったから。「そして誰かが難しい時には、他の誰かが代わりに動く」みんなで補完し合う雰囲気できていた。

なんとか中国入り、そして入山。「BCまでうまく行けば、その遠征は成功する」と誰かから聞いたことがある。そう、厄介なことは大体入山までに起こる。今回はまさにその通りだった。買出しでは英語が通じず、諸々の勝手が日本と違う（クレカや通信機器、マップアプリは使えない、など）。そして入山予定日に、ゲートでの入山拒否。どうやら数日前に起きた近隣の山での事故が理由で一時的に入山規制がされていた。そんななか、エージェント以上に私たちをサポートしてくれたのはおはるの妹で中国語を話せる萌ちゃんだった。中国の留学経験がある彼女は買い物から入山のゲートまで私たちに同行してくれ、すべての面倒ごとを引き受けてくれた。彼女のサポートなしでは入山すら危うかったかもしれない。

山で難しかったことは？未踏峰で情報が少ないため、ルートと装備を絞り切れなかったこと。メンバーの高所経験が浅いことでなにかと判断に迷い時間がかかってしまったこと。特にセラックや頻発する落石など初めての局面ではリスクが図れず判断に迷った。それから何よりも大事だったのは仲間とのコミュニケーションと人間関係。山ではいつも大切にしていることだけど、ここがうまく行かないとストレスを抱えて登ることになるし、そうなるとても危険だ。私たちはお互い気を使いながら楽しむことができたけど、正直言って少し気を使いすぎた部分もあったような気がする。そう思ったのはBCでのこと。水汲み、水作り、調理と誰かが何かやり出すと、「私もやらなきゃ！」と気を使って、レスト日にも関わらず疲れてしまっていた気がする。女子だけのパーティだから特にそうだったのかもしれない。匙加減は難しいが、もっと気楽な方がいいかもしれない（BCでは！）

今回山頂に立てなかったわけで、下山しながら悔しい気持ちはあったのだけど、今はもうその気持ちはない。むしろあんな危険な局面があったのに、無事に下りてこられてよかったな、と。最近あったフランス人の知人が言っていた。遠征でもっとも大事なことは“Return alive”だと。少なくとも遠征から帰ってからは前になかった高所への興味が少し

ずつ湧いてきた。日本でも海外でも、今回の経験で少しは判断力が付いただろう。それだけでもやった意味があったな、と思う。

■鈴木

2024 年の春、上野から中国遠征の話を聞いた。

ワクワクして行ってみたいと思ったが、猫と仕事どうしよう？迷惑かけないかしら？色々悩ましかった。とりあえず訓練山行に参加しつつ、行けそうだったら行く感じで、、、という感じでメンバー入りすることになった。

猫のお世話をしてくれた友人よ、ありがとう！

取引先の方々にもご理解頂きとても感謝しています。

2025 年 8 月、遠征の 2 ヶ月前に高度順応でインドに行った。初海外登山&20 年ぶりの海外旅行は上野、上野の友人プリヤンカのおかげでとても充実したもので楽しかった。

しかし高度順応はまったく上手くいかず、高山病になり辛かった。食欲もなくなり、お粥しか食べられない時もあった。症状が出て数日後にダイアモックスを飲んでみたが、効果はよくわからなかった。インド(レー)ではダイアモックスが薬局で安く売られていたので、中国では前もって飲むのだ！と思い大量購入。

そしてついに 10 月、本番の中国へ。

高山病を覚悟して行くも、とても上手く高度順応できた。結局 6230m までちょっとした頭痛くらいで、食欲も旺盛、何でも食べられた。結局ダイアモックスは一度も飲まなかった。辛かったことは C1~C5 で寒くて眠れなかったことくらい。寒さに弱いので、カイロをいっぱい持って行きたかったが、重いので 6000m から使う分だけ持って行った。酸素が薄いところでもカイロはちゃんと温くなった。

C3(5400m)から氷河の偵察では上野リーダーのルーフアイがお見事だった。氷河の迷路を抜けて雪原に出た時は感動した！

C4(5800m)から C5(6230m)に向けて出発した時は、4 人揃ってここまで来れたことに、感極まってウルウルしてしまった。

C5 に向かう最後のピッチは、ワクワクドキドキだった。C5 まで順調に進んでこられたから山頂にたてるかも！と思ったり、、、

22 日間も山の中にいるということは初めての経験だったが、メンバーのおかげで何不自由なく快適に過ごせた。3 人共、強いし、頭良いし、優しいし、山行中とにかくすごいなあと感じていた。おかげで無事下山。1 ヶ月楽しく過ごせた。

中国はご飯が美味しく、街や村もきれいだった。上野の妹もいちゃんのおかげで入山までのトラブルも全てまるく収まり、買い物もスムーズだった。もいちゃんの友人シャオリ

ジャンやリエゾンオフィサーの若者もとても楽しくていい人達だった。

今回が最初で最後の高所登山、海外遠征と決めてのチャレンジだったが、下山後すぐにやっぱりまた来たい！と思ったのは自分でも意外だった。帰国後 2 週間くらいは、まだ中国の山の中にいる夢ばかり見ていた。

信じられないくらい美しい景色をたくさん見たり、素晴らしい経験をさせてもらえた。

■お礼

今回のロンシャン遠征は、多くの皆さまの支えがあって無事に終えることができました。

装備、商品協力頂いた株式会社モンベル様、大塚製薬株式会社様、株式会社大塚製薬工場様、提供に尽力頂いた株式会社ライトパブリシティ様、海外登山奨励金という大きな後押しをくださった日本山岳・スポーツクライミング協会様、そして支援してくださった個人の皆様にも、心より感謝申し上げます。

また、相談に乗って頂いた大内尚樹様、気象チーム、緊急連絡先の留守本部、日頃から応援してくださった皆さま、家族のサポートが、この挑戦を最後まで続ける力になりました。ありがとうございました。

これからも一歩ずつ進んでいきますので、引き続き見守っていただけたら嬉しいです。